

在日コリアン二世の方言接触

—首都圏に在住する慶尚道出身者の事例から—

吉田さち(跡見学園女子大学) 松本和子(東京大学) 金延姫(東京大学大学院研究生)

1. はじめに

本稿は首都圏在住の在日コリアンにおける方言接触とコイナー形成に関する研究の途中経過を報告するものである。オールドカマー¹における朝鮮語の方言変容に関する研究は、これまで大阪府生野区など関西で済州道方言話者を対象に行われてきた(金美善 2001, 康貞姫 2003, 宋実成 2010)。しかし関西に次いで在日コリアンが集中する首都圏²を調査地とした方言研究や、戦前から最も多くの移民を送り出した慶尚道の出身者を対象とした方言研究は管見の限り見当たらない。そこで本研究はそうした先行研究の穴を埋めるため、首都圏に在住する慶尚道出身者二世の朝鮮語の語彙・音韻に関する調査研究に着手した。本発表では9名の話者を対象とした事例研究という位置づけで、慶尚道方言が日本の地で朝鮮語の諸方言や南北の標準語、さらに日本語との接触も加わりながら、どのような変容を遂げているかを考察していく。

本研究は在日ブラジル人コミュニティの方言・言語接触とコイナー化の研究(松本・奥村, 2019)で用いられた理論的枠組みのうち「フィーチャープール(feature pool)」(Mufwene 2001, 2008)と「平準化(leveling)」(Trudgill 1986, Britain 2018)を採用するとともに、新たに「ダイナミックモデル(Dynamic Model)」(Schneider 2007)の「傍層ストランド(adstrate strand)」の概念を加え分析を行う。日本国内の複数の移民コミュニティの研究で同様の理論的枠組みを用いた分析を行うことは、将来的に国内の移民言語間の比較研究を可能にするとともに、国内外の社会言語学研究の理論構築にも役立つものだと考える。

2. 在日コリアンの背景

2.1 在日コリアンの移住前と移住後の言語生活

朝鮮半島では1910年の植民地化以後、1938年に「第三次教育令」が公布される頃まで「国語」(日本語)の普及政策は主に学校教育を通じて進められたが、初等教育への進学率は低い状態が続き日本語の普及は進んでいなかったという(熊谷 2006)。その後、日本語の常用運動は全国的に展開され、全ての民衆に日本語を習得させ、公私問わずあらゆる場面で日本語使用を促す「国語全解・国語常用」運動が実施された(熊谷 2006)。一方、朝鮮語の教育は1938年から随意科目となるものの漸次廃止されたこともあり、当時の朝鮮人児童の朝鮮語の識字率は低かったという(李炯喆 2016)。学校や公的場面では日本語、家庭や民族内のやり取りは朝鮮語を用いるダイグロシアの状況にあったことが伺える。すなわち、在日一世は家庭や近隣で地元の朝鮮語の方言を第一言語として身に付け、学校教育で日本語をある程度学習した後に渡日したと考えられる。本研究の調査対象者である日本生まれの二世は、方言話者である一世に育てられ、主に家庭で朝鮮語の方言を自然習得したが、日本の学校で習得した日本語がその後の日本での生活の中で優勢な言語になっていったという。現在では日本語が第一言語であり、朝鮮語は必ずしも話せるレベルではなく記憶の中に断片的に留まっているという話者が多い。

2.2 在日コリアン一世の出身地と方言的背景

オールドカマー一世の渡航は1910年の韓国併合が契機となり、それまで数千人規模だった移住者の人口は増加の一途を辿り、とりわけ1930年から1940年にかけて29万8千人から約119万人へと激増した(在日本大韓民国民団, 以降「民団」, 2019)。1937年当時、在日コリアンの本籍地は慶尚南道、慶尚北道、全羅南道、全羅北道、忠清南道の順に多かった(坪江, 1965)。特に慶尚道、全羅道等の南部出身者の人口が圧倒的に多い。図1は当時の行政区画にほぼ合致した朝鮮語の方言区画を示している。韓国政府国家記録院(2019)によると、当時、親類・知り合い等の社会的ネットワークにより朝鮮半島で同郷の者が日本においても同じ地域で共に暮らし、働いていたといわれている。2011年時点の本籍地は、最も人口の多い道から順に、慶尚南道、慶尚北道、済州道、ソウル特別市、全羅南道となっている(法務省, 2012)。当時も現在も慶

¹ 本稿では生越(2005)等を参考に「オールドカマー」を日本統治下の朝鮮半島(1910~1945)からの移民とその子孫と定義し、その二世を調査対象とする。

² 2018年末現在、在日コリアンの人口の多い都道府県は、大阪府、東京都、兵庫県、愛知県、神奈川県、京都府、千葉県、埼玉県である(法務省 2019)。東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県等の首都圏にも多くの在日コリアンが居住していることが分かる。

尚道出身者が最も多く、次いで済州道出身者³が多い。こうした一世の方言背景は南部の諸方言が在日コリアンの朝鮮語変種の形成に影響を及ぼす可能性を示唆している。

3. 分析の枠組み

本稿では在日ブラジル人コミュニティの方言・言語接触とコイナー化の研究(松本・奥村 2019)で採用した理論的枠組みのうち、「平準化」と「フィーチャープール」を用いて分析を行う。まず Trudgill (1986) や Britain (2018) は方言接触によって新たなコイナーが形成される際にたどる言語的プロセスを類型化し、これらを総称して「コイナー化のプロセス (koineisation processes)⁴」と呼ぶ。その中で最も一般的なプロセスとして「平準化」が挙げられる。これは方言混合において多数派の変異形が生き残り、有標な変異形が消失する現象を指す。この文脈における有標性とは、①新天地において数の面で少数派であること、②世界的に見て稀な言語的性質を有すること、③明確にステレオタイプの対象とされていること、④子供の言語習得において後に習得されるもの等を意味する(松本・奥村 2019: 253)。幼少期に親から習得した慶尚道方言に対し、韓流ブームによる韓国ドラマの視聴やニューカマーとの交流を通じて後に習得された変異形が消失するか、あるいは生き残るかどうかを検証していく。

一方、Mufwene (2001, 2008) は方言接触・言語接触の状況下で、様々な方言・言語要素が話者の頭の中に蓄積されている状況を抽象的に表わす「フィーチャープール」という概念を提唱している。話者はフィーチャープールから既存の要素を選択したり、複数の要素を組み合わせ新たな構造を作り出したりする。ここで重要なのは、言語接触の環境下においては「外来言語要素(xenolectal feature)」もさらに加えられる点である(松本・奥村 2019: 252-3)。つまり在日コリアンの二世の優勢言語である日本語からの言語要素も彼らの朝鮮語のフィーチャープールに含まれることが予測される。さらに本研究では Schneider (2007) の提唱するコロニアル英語変種の形成過程をモデル化した「ダイナミックモデル(Dynamic Model)」の「傍層ストランド(adstrate strand)」の概念を加える。これは初期の移住者よりも遅れて入植する集団からの言語的影響を加味するために用いられた概念で、現在の韓国南部にルーツを持つ在日コリアンの場合、戦後、朝鮮学校へ通った経験のある二世に北朝鮮の言語要素が含まれる場合「傍層言語要素(adstrate feature)」として扱う。

4. 調査の概要

調査は2019年7月～12月にかけてインフォーマントの自宅、慶尚北道道民会会場、民団支部等で実施した。中間報告として本発表では在日コリアン二世9名(男3名、女6名)から収集した①アンケート、②語彙調査(翻訳式・なぞなぞ式)を分析する。年齢は73歳～86歳、全員が家で親から朝鮮語を学んだと証言している。また、9名中8名は両親ともに慶尚道出身者、9名中6名の配偶者が慶尚道出身の親を持つことから、当時の同郷の者同士の強いつながりが伺える。

本研究では日本統治下の1910年代から1930年代にかけて小倉(1944ab)が朝鮮半島全土で行った方言調査を基礎資料として用いる。これは移住者の方言接触と変容を分析するためには、現在の祖国の方言・標準語との比較だけではなく、移住当初の方言との比較を行うことが重要であるためである(松本 2016)。小倉(1944ab)を基とした2つの言語地図(中井・亀山, 2007; 福井 2017, 2018)を活用し、①慶尚道方言の音韻的特徴が見られること、②日常生活でよく使われる語彙であること、という2つの基準を満たす62項目を選んだ。さらに、金由美(2005)・金美善(2001)等や首都圏在住の在日コリアン二世との予備調査を参考にして、オールドカマー独自の音韻・語彙的特徴が見られる語彙・表現74項目を加え、計123項目を本研究の調査語彙とした。

本発表では音節核のヴァリエーションを考察する。日本統治下に作られた朝鮮語の標準語⁵では半母音(/j/と/w/)を含む多重母音で発音されていた音節核が、慶尚道方言等では半母音無しの単独母音で発音される傾向にあった。調査語彙のうち音節核のヴァリエーションが見られる単語延べ10語(叫(骨) [ʔpja])など/j/を含み得る単語延べ6語、□(耳) [kwɪ]など/w/を含み得る単語4語を対象とし、計87トークン⁶を分析していく。

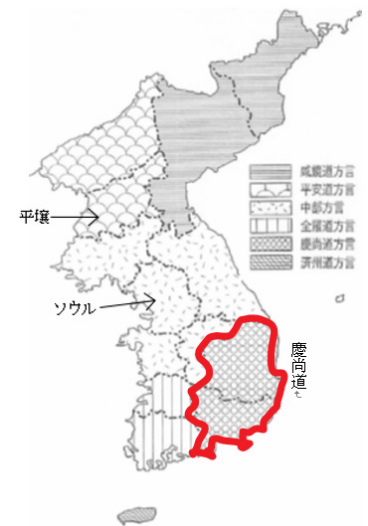


図1. 朝鮮半島の六大方言 (李翊燮・李相億・蔡琬 2004 を改編)

³ 行政区画上、済州道は1937年時点では慶尚道に次いで多くの移民を送り出した全羅南道の中に組み込まれていた。

⁴ 紙幅の制限のため、ここでは本稿で関連のあるプロセスだけを取り上げた。

⁵ 朝鮮語における標準語の制定は、日本統治下である1912年の「普通学校用諺文綴字法」まで遡る(李翊燮・李相億・蔡琬 2004)。当初はソウル方言を標準語とし韓国ではそれを継承したが、北朝鮮では後に平壤方言を標準語として定めるとともに「文化語」と命名した(李翊燮・李相億・蔡琬 2004)。しかし当時作成された方言地図が以下で示すように、当時の標準語とされる変異形が必ずしもソウルで観察されるわけではない点に留意されたい。

⁶ 本発表では暫定的に、語彙を覚えていない場合はカウントせず、方言形と標準形の両者を発話した際はそれぞれカウントした。また、앞사귀(葉) [ip³sa-gwi], 뼈다귀(骨) [pjo³da-gwi] はそれぞれ半母音/w/を含み得ない語形を回答したものが12トークンあり、暫定的に「その他」としてカウントした。今後方針を固めていきたい。

表 1. 半母音/j/を含む多重母音と半母音/j/無しの単独母音のトークン数と割合

位置	語頭	語中	語中	語中	語中	語中	合計
調査語彙	양념장(ヤンニョムジャン) [jaŋ-njɔm-dʒaŋ]	뼈(骨) [^h pjɔ]	비녀(かんざし) [pi-njɔ]	병아리(ひこ) [pjɔŋ-a-ri]	며느리(嫁) [mjɔ-nuu-ri]		(語中)
[j]を含む多重母音	14 (100%)	5 (35.7%)	6 (66.7%)	2 (22.2%)	3 (50.0%)	2 (18.2%)	18 (36.7%)
[j]無しの単独母音	0 (0.0%)	9 (64.3%)	3 (33.3%)	7 (77.8%)	3 (50.0%)	7 (63.6%)	29 (59.2%)
その他	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (18.2%)	2 (4.1%)
計	14 (100%)	14 (100%)	9 (100%)	9 (100%)	6 (100%)	11 (100%)	49 (100%)

5. 分析

5.1 単語間のゆれ

図 2 は 1910 年代から 1930 年代当時の「비녀(かんざし)」[pi-njɔ]の分布を示した方言地図である(福井 2018: 32)。慶尚道やソウル周辺の中部方言では半母音を伴わない単独母音の[pi-ne]や[pi-na]が優勢であるが、標準形[pi-njɔ]はごく僅か中部方言で確認される少数派であることが分かる。表 1 は二世の半母音/j/を含む多重母音と半母音無しの単独母音の出現数と割合を単語ごと・位置ごとに示したものである。結果は語頭と語中では明確な違いを示した。語頭(ヤンニョムジャン[jaŋ-njɔm-dʒaŋ])では 100%半母音/j/を含む多重母音で発音され、語中では「뼈(骨)」[^hpjɔ]以外の 4 語全てが 50%以上半母音を伴わない単独母音で発音された。つまり、語中では半母音無しの単独母音、語頭では半母音を伴う多重母音が多いという分析結果は、慶尚道方言の半母音/j/は語頭ではよく現れるが、子音・母音間では現れにくいという出現の制約(趙義成 2007)に一致している。これは慶尚道出身者二世が慶尚道方言の言語的制約も継承していることを示唆する。

一方、図 3 は当時の「앞사귀(葉)」[ip²sa-gwi]の分布を示した方言地図である(中井・亀山 2007: 231)。凡例では[gwi]が[gui]と表されているので留意されたい。これは複数の変異形を持つ単語で、慶尚北道方言では半母音を伴わない単独母音の[ip-sa-gu]が、慶尚南道方言と中部方言では[ip-p^ha-ri]が優勢形であるが、忠清道・全羅道では標準形[ip²sa-gwi]が確認される。9 名の発音を分析した結果、興味深いことに慶尚北道出身の親を持つ在日二世であっても、慶尚南道方言と中部方言で使われていた[ip-p^ha-ri]が圧倒的優勢形で、慶尚北道方言の[ip-sa-gu]は少数派であることが判明した。さらに標準形[ip²sa-gwi]を用いた話者はいなかった。このことから、二世は必ずしも親の出身方言をそのまま継承するわけではなく、コリアン集住地などで多様な方言が接触した結果、方言混合か起きていた様子が伺える。

表 2 は半母音/w/を含む多重母音と半母音無しの単独母音のトークン数と割合を単語ごとに示したものである。結果は二分され、半母音/w/無しの単独母音が 50%以上現れた単語は 4 単語中귀(耳)[kwɪ]と까마귀(カラス)[^hka-ma-gwi]の 2 語で、残りの 2 語は「その他」が多かった。後者の뼈다귀(骨)[^hpjɔ-da-gwi]は「뼈」(骨)だけで単語として成り立つため、半母音/w/を含みうる接尾辞[-da-gwi]を用いない語形を回答したことによる⁷。一方, 앞사귀(葉)[ip²sa-gwi]は前述の通り本調査では慶尚南道方言と中部方言の変異形[ip-p^ha-ri]が優勢形であったため[gwi]を用いない語形を回答したことによる。実際に半母音/w/を含みうる語形を含めた回答をしたものは全て[w]を含まない単独母音で発音されている。つまり、これは慶尚道方言で多数派であった発音が優勢形として二世の間で生き残っているこ

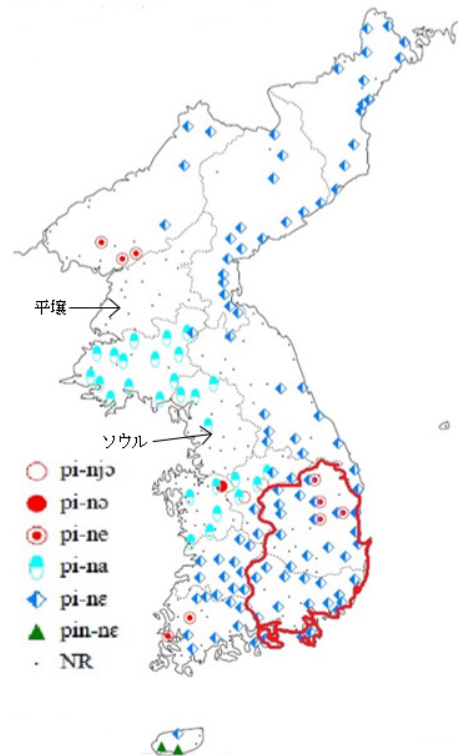


図 2. 비녀(かんざし)の分布 (福井 2018 を改編)

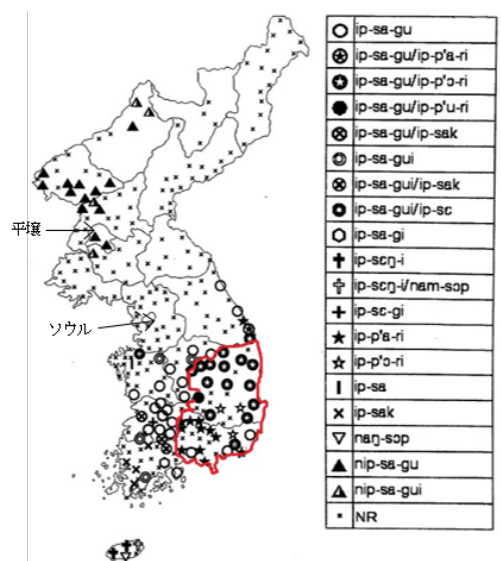


図 3. 앞사귀(葉)の分布 (中井・亀山 2007 を改)

⁷ ハングルは字母が弁別的素性に対応していて読み上げ式は適切ではないため、翻訳式・なぞなぞ式の形式で調査を行った。

表2. 半母音/w/を含む多重母音と半母音/w/無しの単独母音のトークン数と割合

調査語彙	귀(耳) [kwi]	잎사귀(葉) [ip- ² sa-gwi]	까마귀(カラス) [² ka-ma-gwi]	뼈다귀(骨) [² pjo-da-gwi]	合計
[w]を含む多重母音	2 (25.0%)	0 (0.0%)	2 (16.7%)	0 (0.0%)	4 (10.5%)
[w]無しの単独母音	6 (75.0%)	2 (22.2%)	10 (83.3%)	4 (44.4%)	22 (57.9%)
その他	0 (0.0%)	7 (77.8%)	0 (0.0%)	5 (55.6%)	12 (31.6%)
計	8 (100%)	9 (100%)	12 (100%)	9 (100%)	38 (100%)

[jaŋ-njom-dʒaŋ]の第二音節末の子音は[m]と[n]が混在し、「뼈(骨)」[²pjo]の語末の母音は[ɔ]だけでなく[o]の発音も観察された。二世にとって優勢言語である日本語からの外来言語要素が話者のフィーチャープールに取り入れられ採用されたと考えられる。また「까마귀(カラス)」の語頭には方言形[²ka-ma-gu]・標準語[²ka-ma-gwi]いずれにおいても本来[²]が入るが、在日コリアン二世では[²]を発音せずに[ka-ma-gu]と日本語風に発音するケースが多々あった。

5.2 話者間の揺れ

図4は半母音の/j/と/w/を含み得る単語の全トークンの発音を話者ごとに示したものである。結果は韓国へ短期留学の経験を持つ話者8を除く全話者で単独母音のトークン数が半母音を含む多重母音のトークン数を上回っていた。つまり一世の出身方言の特徴である半母音無しの単独母音が優勢形として二世において生き残り継承されていることを示している。特に半母音を用いなかった話者1・3は言語形成期を在日コリアン集住地で過ごし、結婚後もしばらくは朝鮮語を家庭である程度用いていたという共通点がある。対照的に半母音を含む多重母音を多く使用した話者5・7は、朝鮮語学校やラジオ番組を通じて朝鮮語を学習した経歴を持つとともに、民団や道民会への参加も積極的でニューカマーとの交流の機会が多く、韓国の親戚に会いに頻りに訪韓しているという共通点を持つ。つまり前者はかつての慶尚道出身者が集う近隣や家庭で朝鮮語を使用していたため当時の慶尚道方言がそのまま記憶に残っているが、後者は現在に至るまで朝鮮語を使い続ける中で現在のソウルやその他の地域からの多様なインプット要素が話者のフィーチャープールに取り混まれたことが考えられる。なお朝鮮語学校へ通っていた話者を含め、今回の調査で当時の平壤の変異形、例えば[²pgɯ-a-ri] (ひよこ)や[²lip-sa-gu] (葉)を用いた話者はいなかった。現在の韓国にルーツを持つ在日コリアン二世の中で朝鮮語が流暢な話者が、北朝鮮の変異形ではなく現在のソウルの変異形をフィーチャープールに取り込む傾向があることは理にかなっていると言えるだろう。

6. 結論

移民一世がもたらした朝鮮語の諸方言が首都圏の家庭やコリアン集住地で接触した結果、方言混合が起こり、二世は一世の親の出身地の変異形のみならず、多様な変異形を含むフィーチャープールを保持している事例を提供した。さらに朝鮮語学校、韓国ドラマ、訪韓によってソウルやその他の地域で使われている変異形を取り入れている話者もいること、二世にとっての優勢言語である日本語からの影響も僅かながら観察されることを示した。しかし全体的には、後に習得した変異形よりも両親・隣人等から最も多くインプットされていた慶尚道方言の変異形が大半を占めるため、多数派の変異形が生き残るという「平準化」が起きていたと考えられる。今後はより多くの被験者からデータを収集し、言語内の・言語外的要因との関連を詳細に分析していきたい。

参考文献 (Selected References)

Britain, D. (2018) Dialect contact and new dialect formation. In C. Boberg et al. (eds.), *Handbook of dialectology*. Oxford: Blackwell.
 福井玲 編 (2017) (2018) 「小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈—第1・2集」, 東京大学人文社会系研究科 韓国朝鮮文化研究室。
 李翊燮・李相億・蔡琬 (2004) 『朝鮮語概説』, 大修館書店
 松本和子 (2016) 「社会言語学の研究動向と方言研究との接点—接触日本語変種の研究を中心に—」『方言の研究』2: 131-150.
 松本和子・奥村晶子 (2019). 在日ブラジル人移民のコイネー形成—方言接触, 創始者効果, フィーチャープールの検証— 『社

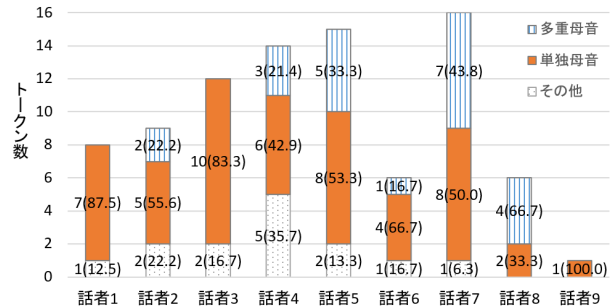


図4. 多重母音と単独母音の話者別トークン数と割合

会言語科学』22(1):249-262.
 Mufwene, S. (2001) *The ecology of language evolution*. Cambridge: Cambridge University Press.
 Mufwene, S. (2008). *Language evolution: Contact, competition and change*. London: Bloomsbury.
 中井精一・亀山大輔 編 (2007) 『朝鮮半島言語地図』, 富山大学
 小倉進平 (1944ab) 『朝鮮語方言の研究』上下巻, 岩波書店
 Schneider, E. (2007) *Postcolonial English: Varieties around the world*. Cambridge: CUP.
 Trudgill, P. (1986) *Dialects in contact*. Oxford: Blackwell.
 坪江汕二(1965) 『在日本朝鮮人概況』, 巖南堂書店